

【イジャ】
ija!

浜松信用金庫

まち・人・文化 地域情報誌

Vol. 11 Spring & Summer 2017

特別企画

「直木賞」で輝く浜松 喜びのダブルインタビュー

●「蜜蜂と遠雷」で栄えある受賞
恩田 陸さん

●受賞作の表紙イラストを担当
杉山 巧さん



“ワンデイ・トリップ”への誘い
南信州
歴史と自然にふれる旅

きらめくひと—2

立命館大学相撲部 野崎舞夏星さん

特別企画「直木賞」で輝く浜松—4

喜びのダブルインタビュー

- 「蜜蜂と遠雷」で栄えある受賞 恩田 陸さん
- 受賞作の表紙イラストを担当 杉山 巧さん

“ワンデイ・トリップ”への誘い—10

南信州 歴史と自然にふれる旅

歴史万華鏡—14

「暴れ天竜」と戦った男たち

探訪 匠の現場—17

浜松風 一瀬堂蔭物店

ワクワクチャレンジ!—20

末広館

はままつ食味紀行—23

もち鯉

浜松の風物詩—24

えんばい朝市

アイドルのようなルックスを持ちつつ、相撲の実力はワイルドクラス。浜松西高校3年生の夏（2014年）に世界ジュニア女子相撲選手権の軽量級で優勝し、2015年には立命館大学スポーツ健康科学部に進学して、強豪で鳴る同大学相撲部に入学しました。そんな彼女の実家は浜松の禅寺、萬福寺（中区八幡町）。小さい頃は、どんな女の子だったのでしょうか。

格闘技との出会いは小学校1年生の頃。3歳上の兄の影響でレスリングクラブに入り、同じく小1で地元わんぱく相撲大会に出場しました。その時、立ち会いの一瞬に勝負を賭け、小よく大を制する相撲の醍醐味に魅了されたのです。小学3年生になると、浜松唯一の社会人相撲クラブである「天方相撲部」に通い、大人の男性選手の胸を借りて、どんどん強くなっていきました。

「中学高校は柔道部でしたが、私に一番合っているのは相撲。今後は得意の投げ技や基本の突き押しに磨きを



かけて、シニアの世界大会で優勝したいですね。ただ、過去に2回、右肩を脱臼骨折してしまったので、肩を筋肉で固めて怪我をしない体づくりをしたいと思っています。目標は、同じ怪我を克服した小さな大横綱・千代の富士関です」

さらに、相撲の現役生活を終えた後の夢は、TVのスポーツ番組を制作するディレクターや、スポーツキャスターになること。「でも最終的には、結婚して実家の寺を継ぐかもしれない（笑）。浜松が大好きなので」と、さわやかな笑顔で語っています。



「小さな大横綱・千代の富士関が私の目標です」

「直木賞」で輝く浜松

喜びのダブルインタビュー

2016年度下期の「直木賞」を受賞した「蜜蜂と遠雷」。「浜松国際ピアノコンクール」をモチーフとした同作品は、音楽の世界を生き生きと描いた青春群像小説として、大きな話題を呼びました。今回、同作品の著者である恩田陸さんと、単行本の表紙イラストを担当した杉山巧さん（浜松のデザイン専門学校卒）に、それぞれの「浜松への想い」を語っていただきました。



恩田さんが「蜜蜂と遠雷」を書くきっかけとなった「浜松国際ピアノコンクール」。1991年から3年に一度開催。2018年には第10回が開かれ、恩田さんも「素晴らしいコンクールなので、次回もぜひ多くの人に聴いてほしい」と語っている（写真は2015年の本選 提供：浜松市文化振興財団）

「蜜蜂と遠雷」で栄えある受賞

恩田陸さん

「浜松国際ピアノコンクール」を
今後も聴き続けたい



——受賞からだいぶ時間が経ちましたが、今はどんなことをお感じになっていますか。

直木賞というのは大きな賞で、それをいただくのはやはり特別なことなんだ、と感じています。これまで何度か文学賞を受賞していますが、今回の直木賞では関係する自治体の方からも祝電をいただきました。こんなことは初めてだったので、今でも強く印象に残っています。

——受賞作の「蜜蜂と遠雷」は、「芳ヶ江国際ピアノコンクール」という架空のコンクールが舞台となっていますが、明らかに「浜松国際ピアノコンクール」がモデルですね。これをテーマに小説を書いてみようと思われたきっかけは何ですか。

2003年の「第5回浜松国際ピアノコンクール」で、ポーランドの

ホールも聴きやすくて素晴らしいと思いましたね。

——16日間のコンクールの間、どこかへ遊びに行かれましたか。

残念ながら、どこにも（笑）。ひたすらコンクールを聴いていました（笑）。

——小説の中で、主人公たちが中田島砂丘と思われる浜辺を歩くシーンもありますが…。

実はそこへも行っておりません（笑）。ホテルの窓から景色を眺めて、「あつ、こんなに海が近いんだ」と思っただけです（笑）。ただ、演奏が終わった後の食事では街中の色々な店に行きましたね。ウナギはもちろん、様々な料理を食べましたが、とにかく気に入ったのは浜松餃子（笑）。もやしが付いているのが面白いと思いました。餃子消費量で浜松は日本一という話も聞きましたよ（笑）。

——浜松にはモチガツオという名物もありますので、次回はぜひ（笑）。さて、ここからは「蜜蜂と遠雷」の内容についてお聞きしたいと思います。まだ読んでない人にはネタバレになるかもしれませんが（笑）、まず「蜜蜂と遠雷」というタイトルに込められた意味についてお聞かせください。

最初に思い付いた作中人物が天才

受賞作の表紙イラストを担当

杉山 巧さん

絵を学び、愛を知り： 浜松は僕の青春の街です



——まさに、ブーンという蜜蜂の羽音が聞こえてきそうな野原の風景。今、杉山さんの後ろに飾られている「蜜蜂と遠雷」の表紙イラスト(原画)は、小説のテーマにぴったりのイメージですね。

ありがとうございます。今回、表紙装画を担当させていただいたことは、本当に光栄の一言です。当初、この仕事をお引き受けした時は、とにかく絵を描くことに集中していました。でも、本が出てからは「この小説は傑作だ」という評判が世間に広まって、「僕の絵が小説の足を引

っ張ってなければいいんだけど…」と、プレッシャーを感じるようになったんです。それだけに、恩田さんが賞を取られた時は本当にうれしくて、描かせていただいていたよかったです。心の底から思いました。

——杉山さんは、浜松の専門学校ルネサンス・デザインアカデミー卒。今回の直木賞受賞作品とは「浜松つながり」の不思議な因縁を感じますが、どのような経緯で「蜜蜂と遠雷」の表紙イラストを描くことになったのでしょうか。

2015年にHBファイルコン

ペという権威あるイラストコンペで、大賞の「鈴木成一賞」をいただいたことがそもそものきっかけです。受賞したのは「群生」という作品。野原に咲く草花を画面一杯に描くことで、植物の生命力や野生のエネルギーを表現しました。

——「蜜蜂と遠雷」の表紙イラストと共通したイメージですね。そうですね。HBファイルコンペ審査員で著名な装丁家の鈴木成一さんが「群生」をすごく褒めてくれたのですが、その後、鈴木さんが「蜜蜂と遠雷」の単行本を装丁すること

になりました。この時、鈴木さんから「群生」のイメージで表紙装画を描いてほしいと依頼されたんです。鈴木さんは僕にこう言いました。「この本は、恩田さんが12年掛けて書いたものすごい大作だから、装画は心して描くように。初めに言っておくけど、俺の気に入るものしか使わないから、気に入らなければ納得いくまで何回でも描き直してもらおうよ。僕は「もちろん、そのつもりです!」と半分びりながら答えましたが(笑)、実際にやってみると想像

以上に大変でしたね。

少年の風間塵くん、彼が野原で蜜蜂の羽音を聞いているというイメージが浮かびました。蜜蜂は自然界の祝福を表し、遠雷は自然界の残酷さという不安定な部分の象徴。これがそのままタイトルになっています。

——イメージの核は、自然界の祝福を受けた天衣無縫の塵くん。その対極にいるのが、音楽の女神のような才能を持ちながら、心に傷を負っている栄伝亜夜ちゃん。そこに女子の夢である「王子様キャラ」のマサルや、凡人ながら誠実で努力家の高島明石らが絡むという構図で

りません。第3次予選を書いているあたりが一番つらかったです。それでも、栄伝亜夜が第3次でブラームスのピアノソナタを弾くシーンは、自分で書いていてほろりしました。

——「亜夜ちゃん、優勝して!」という読者の切なる願いもありましたが、結局、1位は……。ご期待に添えなくて、申し訳ありません(笑)。誰を優勝させるかは本選を書くまで未定でした。結果を書かずに終わらせようかとも思ったのですが、ここまで書いておいてそれはないだろうと(笑)。「なぜ、あの順位になったのか」とはよく聞かれます。でも、いざ決めてみると自分で腑に落ちるというか、納得のいく順位になったと思っています。

——「観客としてコンクールを聴く中で、何か小説のイメージがひらめくかも……。ひらめくといいですね(笑)。それが続編を書くきっかけになるかもしれません(笑)。



「蜜蜂と遠雷」
恩田 陸
ピアノコンクールを舞台に、人間の才能と運命、そして音楽を描き切った著者渾身の大作。若き天才たちが繰り広げる壮絶な戦いに、ページをめくる手が止まらない。
出版社:幻冬舎

Profile



おんだ・りく

1964年、宮城県生まれ。1992年、「六番目の小夜子」でデビュー。2005年、「夜のピクニック」で第26回吉川英治文学新人賞および第2回本屋大賞を受賞。2017年、「蜜蜂と遠雷」で第156回直木三十五賞及び2回目の本屋大賞を受賞。



——「ダメ出し」は何回もありましたか？
それはもう(笑)。提出するたびに「これはちょっと違うな」とか、「これじゃ普通すぎる」とか、「ちょっと、とげとげしい」とか。結局、自分でボツにしたものを含めて8枚の装画を制作し、鈴木さんには4回提出しました。最初のうちは「群生」

を展開させて少しイメージの違う作品を描いていたのですが、鈴木さんのイメージが「群生」そのものに近いということがだんだんわかってきて、それに合わせて描いたものが最終的に採用となりました。
——さぞかしプレッシャーは大きかったですよね。
それはもちろんそうですが、正

直、うれしさの方が強かったですね。鈴木さんは装丁の第一人者で、僕にとって雲の上の存在。そんなすごい人と一緒に仕事をできるだけで、身に余る光栄という想いが常にありました。その上、恩田さんが賞をお取りになったのですから、僕にとって二重の光栄というしかありません。これを糧に、今後も日々頑張っていきたいと思っています。
——ところで、杉山さんは実家が焼津市。地元の高校を卒業後、浜松のルネサンス・デザインアカデミーで学んだわけですね。

そうです。浜松で生まれて初めての一人暮らしを経験したんですが、すごく楽しかったですね(笑)。いい思い出がたくさんあります。友達と一緒に中田島砂丘へ遊びに行ったり、有楽街辺りへ飲みに行ったり。昔、駅前にあったイトーヨーカ堂の中の写真屋さんで、現像のアルバイトをしたこともあります。実は、専門学校で前の席に座っていた同級生の女の子が今の妻で…(笑)。浜松は、僕にとって青春の街ですね。

——浜松に住んでいたのは二十歳までの2年間。その後はずっと東京でお仕事をされていますが、浜松との縁は今でもありますか。
大あります(笑)。僕はウナギが

大好きで、毎年、土用の丑の日には浜松の妻の実家からウナギを送ってもらっています。結婚した時、浜松で両家族顔合わせの食事を開いたのですが、お店はウナギ中心の会席料理屋さんにごだわりました(笑)。コースの最後のうなぎが最高です(笑)。
——奥さんとは遠距離恋愛だったのですか。
はい。僕が東京に行ってから、妻

作品の一例



草花や鳥、魚の群れなどを勢いのあるタッチで描写。その時のエネルギー、感情を大切にし、大半の作品は約1日で完成させるという。2017年はましんカレンダーの装画も手掛け、大きな反響を呼んでいる。URL: www.inori-books.net

下の色が少しだけ透けたりして、色んなニュアンスが出てくるんです。僕は、いい絵を描くというよりも、自分の下手なところや迷っているところを、作品の中ですべてさらけ出したいと思っています。その根底には、人としてちゃんと生きたい、真面目に誠実に生きたいという想いがあって、そんな自分の内面が一番のモチーフですね。

——作品は自分の心を映す鏡というのでしょうか。
そうかもしれません。「今後、どんな絵を描きたいですか?」と聞かれると、「そうですねえ」なんて、へらへらした感じで答えちゃうんですけど(笑)、やっぱり「ちゃんと生きている」ことを反映したような作品を創り続けたいと思います。

撮影協力: アート専門店「ページワ
ン」(中区鹿谷町)

Profile



すぎやま・たくみ
1983年、静岡県焼津市生まれ。2003年、専門学校ルネサンス・デザインアカデミー卒業。2015年、HBギャラリーにて個展を開催。同年、HBファイナルコンペ vol.26 にて鈴木成一賞を受賞。



©川本プロダクション

●川本喜八郎人形美術館

NHKの人形劇「三国志」など芸術的な作品で多くのファンを魅了した人形美術家・人形アニメーション作家の川本喜八郎。江戸時代から続く飯田の人形劇の歴史と人々の情熱に感銘し、「飯田こそ人形たちに一番ふさわしい場所」と「三国志」「平家物語」などの人形を寄贈、2007年3月開館した。人気の諸葛孔明はじめ、見る角度によって表情が変化する人形たちは、まるで生きているよう。着物の帯地などで作られている衣装も見事だ。

●りんご並木と三連蔵

歴史を感じる「三連蔵」。飯田の水を使用したコーヒーは味もまろやか。付近の市営駐車場は1時間無料なので気軽に利用できる。



●人形時計塔

「人形劇のまち いいだ」のシンボルとして、1988年に設置された人形時計台。定時になると、4体の人形による人形劇「マリオトピア」を演じる。



いいだ

自然豊かな山間地から飯田の町に入ると、雰囲気はガラリと変わる。通称「丘の上」と呼ばれる飯田駅を中心とした市街地は、古くから城下町として栄え、安土桃山時代に基盤の目状に整備された。飯田駅からならだかな坂を下っていくと、飯田市のシンボル「りんご並木」と交差する。1947年の大火後に防火帯として作られ、春には白い花、秋には真っ赤な実が街並みを彩る。一角に雰囲気のある土蔵「三連蔵」を発見。江戸時代に建てられ、大火を奇跡的に生き延びたという。今はカフェやギャラリーに再生され、地域のコミュニティとして賑わっている。

一方、飯田市が「人形劇のまち」として有名なのをご存じだろうか。江戸時代に黒田人形・今田人形に代表される「人形浄瑠璃」が伝えられ、以来地元の人々に愛され続けて来た。1979年から、毎年8月に開催されている「いいだ人形劇フェスタ」には、全国および世界から人形劇団が集まるという。2007年には、人形美術家の川本喜八郎を記念する美術館が開館し、新たな文化発信の拠点として注目を集めている。

りんご並木と人形劇文化の香る街—飯田

への誘い

南信州 歴史と 自然に ふれる 旅



松田城址南端から天竜川と飯田のまちを望む

●元善光寺



●松岡城址



●松源寺



いちだ

直虎の許嫁、直親のかくれ里—高森町

中央アルプスと南アルプスに挟まれた南信州は、高低差が大きく変化に富んだ地形。四季折々に彩り豊かな風景が優しく迎えてくれる。

飯田ICを降りて最初に訪れたのは、市田柿でも有名な高森町の松源寺。遠江井伊谷の女領主・直虎の許嫁だった井伊直親（亀之丞）が9歳から20歳まで隠れ住んでいたという。伊那谷とも呼ばれるこの地は、古くから東西南北の街道が交差し、天下を狙う武将たちにとって重要な拠点で、多くの山城が築かれた。その一つ松岡城址近くに松源寺はある。半島状に突き出た段丘上に築かれた平山城は、五つの帯曲輪が配置され、強固な防御力を物語る。標高約560メートルの本丸跡からは南アルプスの青い山脈を背景に、天竜川と飯田の町が一望できる。亀之丞もここから遠く離れた井伊家のことを想っていたのだろうか。

この松源寺に続いて、ぜひ訪れたのは「元善光寺」。長野市善光寺の御本尊が最初に置かれたところであり、開山・本田善光卿の誕生の地だ。「善光寺と元善光寺、両方お詣りしなければ片詣り」ともいわれている。



アクセス

東名高速道路・浜松西ICから名古屋方面へ。東海道環状自動車道に進んで、飯田ICで降りて国道153号線で目的地へ。距離優先なら、浜松から三遠南信自動車道を北上するルートもあるが、途中の未開通部分は山道が多く、時間もかかる。電車なら、浜松駅から新幹線で豊橋へ。豊橋からJR特急で飯田駅、さらにJR飯田線で目的地へ。

情報協力

高森町教育委員会、川本喜八郎人形美術館、飯田観光協会、天竜峡観光案内所

●若がえりの湯



●ココロファームビレッジ



JR飯田線「天竜峡駅」
近くのお土産店で
飯田の名産品に
出会うことができる



●名勝天龍峡

天龍峡は、中央・南アルプスからの清流により、長い年月をかけて浸食された花崗岩の奇石怪石でできた景勝地。天龍奥三河国定公園に指定されている。弘化4年(1847年)に、岡山の漢学者・阪谷朗庵によって「天龍峡」と命名されたという。春には桜やつつじ、夏はヤマユリ、秋は紅葉、冬は雪景色と、四季折々様々な表情を楽しめる。明治15年(1882年)に書道家・日下部鳴鶴が十の岩峰を選んで文字を刻んだ天龍峡十勝は、ライン下りの船上から見る事ができる。



●天龍ライン下り



天竜川は、諏訪湖から遠州灘へと流れ、「暴れ天竜」の異名をもつ。その中で、ここ天龍峡は両岸に険しい巨岩や奇石がそそり立ち、神秘の世界。深いエメラルドグリーンの川面は、見ているだけで心癒される。

飯田から天龍峡へは、車なら国道151号線で南下し、電車ならJR飯田線で約20分。赤い屋根が可愛い天竜峡駅前にある「天龍峡百年再生館（観光案内所）」を起点として、一周約2キロメートルの天龍峡遊歩道が作られている。多少坂や階段はあるが、ゆっくり歩いて1周約1時間。澄んだ空気が心地よく、展望台や吊

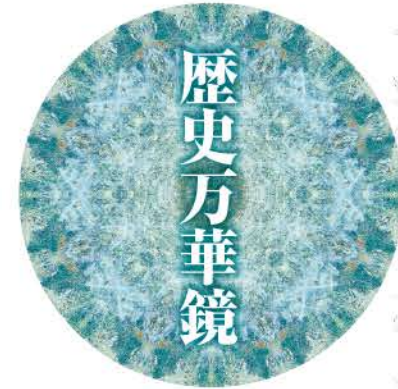
自然が織りなす
水と岩と緑の神秘

り橋からの絶景には思わず感嘆の声が出る。天龍峡をもっと楽しむなら、「天龍ライン下り」がおすすだ。乗船時間は40〜50分で、水しぶきを浴びながら眺める峡谷美はスリル満点。そして、疲れた体を癒しに日帰り温泉「若がえりの湯」へ。4月に新装オープンしたばかりで、アルカリの泉質は美肌効果抜群だそう。

こうして南信州の自然と歴史をたっぷり堪能したら、おみやげを探してみよう。伊那谷特産の「市田柿」は、繊細な甘みが絶品の干し柿。柿餅や、ゆずピールチョコ。地酒といえば、キリッとした辛口の「喜久水」。フルーツ王国南信州を代表する「サンふじ」や梨「南水」、さらに新鮮な野菜は直売所で購入したい。

また農業リゾート施設「ココロファームビレッジ」では、地元農家60軒と連携し新鮮な農産物を販売。すぐ横のレストランで、地場野菜たっぷりのメニューを味わうこともできる。ご存知信州そばは40軒以上もある。そば巡りも楽しい。そのほか、飯田餃子や山肉料理（ジビエ）も人気。実は、飯田は「日本一の焼き肉のまち」としても有名なのだ。

春は桜、夏は新緑、秋は紅葉、冬は雪景色…。四季折々の魅力が南信州であなただを待っている。



「暴れ天竜」と戦った男たち

古来、「暴れ天竜」の異名を持つほど氾濫を繰り返し、流域の村々を苦しめてきた天竜川。「荒れ狂う竜をなだめ、人々に幸福をもたらす恵みの川に変えよう」。かつては不可能とも思われた治水・水利の難事業に、人生を賭けて取り組む男たちが江戸から明治の浜松にいた。これは、そんな不撓不屈の挑戦者たちの戦いの物語である。



▲ 川筋が真っ直ぐに整備された現在の天竜川(東区中野町付近) ▲ 天竜川の川筋は時代によって変遷し、17世紀の天竜川は東へ大きく蛇行し、19世紀には全体に西へ寄りつつ流れがより細分化していた

ビジネスの巨人の挑戦を退ける

「信州から遠州・掛塚に至る水運の経路を拓くため、天竜川の開削工事に着手せよ」。慶長12年(1607年)、大御所・徳川家康は京都の豪商・角倉了以に対してこのように命じた。家康の狙いは、天竜川の流れを利用して信州の豊かな山林資源を遠州灘まで運び、そこからさらに海上ルートで江戸や京大阪まで送ること。京の大堰川や高瀬川、駿河の富士川などの開削で実績のある了以は、家康の命を謹んで受けた。了以といえど、16世紀末から17世紀初頭に行われた朱印船貿易で、ベトナム、カンボジアなどの東南アジア諸国と交易し、巨万の富を築いた人物として知られる。その富を利用して、了以が貿易の次に手掛けたのは日本国内の水利事業だ。当時、山間部から沿岸部への輸送は人力か牛馬で山道を行くのが中心。「岩場の多い山間部の川を開削し、舟で大量の荷物を運べるようにすれば、輸送効率は飛躍的に向上する」。そう考えた了以は京都近辺で河川の開削に着手し、数々の難工事を成功させて、江戸初期の日本に「物流革命」を起こした。

これを見た家康は了以に富士川の開削を命じ、了以はこれを短期間で成し遂げる。「それなら次は天竜川だ」。かつて、浜松を居城としていた家康がそう考えるのは自然なこと。しかし、荒ぶる天竜川の激流は、了以の前に大きく立ちふさがる。「水勢、猛激にして手を施すところなく」と、あの了以がさじを投げるほどの困難に直面し、やむなく開削工事は中止された。こうして、暴れ天竜はビジネスの巨人、了以の挑戦を退けたのだった。

袴田喜長が二俣川を改修

了以の挑戦から147年後の宝暦4年(1754年)。豊田郡二俣村(現在の天竜区二俣)で、天竜川の支流・二俣川の改修に挑もうとする一人の男がいた。男の名前は袴田喜長。二俣村の名主である。この頃は、天竜川が増水するたびに村内を流れる二俣川が逆流し、大洪水を起こして家々を水浸しにしていた。村を水害から守るためには、川の流れを変えるしかない。喜長は村人たちと相談し、「二俣川がぶつかる鳥羽山を掘り割り、川の水を天竜川に真っ直ぐ流す」という計画を立てる。実際に工事が始まったのは計画立案から11年後の明和3年(1765年)。喜長が私財を投じての大改修であった。工事は村人総出で進められたが、掘り割りの作業が難航したため、途中から隧道(トンネル)方式に変更。安永3年(1774年)、長さ109メートルの隧道が開通し、寛政3年(1791年)にすべての治水工事が完了した。



▲ 袴田喜長が開削した鳥羽山の掘割



▲ 度重なる天竜川の氾濫は沿岸の村々に甚大な被害をもたらした(写真は明治時代)

工事期間は30年、動員された人足は延べ2万3000人以上。その4年後の寛政7年(1795年)、豪雨によって隧道は大崩壊し、結果として現在のような掘割の姿となる。天の味方も得て、喜長は川との戦いにおける「局地的勝利」を収めたわけだ。だが、これで「暴れ天竜」が大人しくなったわけではない。天竜川の本格的治水を実現するには、ある一人の男が明治の世に出現するのを待たねばならなかった。

治水事業に献身した郷土の偉人

時は明治10年(1877年)12月。当時、政府の最高責任者だった内務卿・大久保利通の面前で、男は必死に訴えた。「天竜川の氾濫を抑えるため、新しい堤防を築かせて下さい。そのために、私は全財産を献納する覚悟であります」。男の真摯な言葉を聞き、大久保卿は大きくうなずきながら言った。「あなたの無私の心はよくわかりました。政府としても今後10年間、補助金を給付して事業に協力しましょう」。明治の元勳をも動かしたこの男こそ、郷土の偉人として今も浜松の人々に仰ぎ見られる金原明善その人である。

明善は天保3年(1832年)、遠江国安間村(現在の東区安間町)で代々続く名主の家に生まれた。この頃、天竜川の堤防は大水で頻繁に決壊し、とくに嘉永3年(1850年)の決壊では、安間村が一瞬にして濁流に呑み込まれるなどの甚大な被害を受ける。明善にとって、この悲惨な光景は生涯忘れられないものとなった。その後も同じ悲劇が繰り返されたが、明治新政府の発足によって明善は一筋の光明を見いだす。「これからは自分たちの努力で地域を災害から守る時代だ」。明善の生涯を賭けた治水・治山の戦いは、ここから始まった。

明善は自らの財産を資本金とする「治河協力社」を設立し、政府の協力も得て近代的な水利事業を開始する。その内容は、堤防の建設・改修だけでなく、西洋式の測量器による天竜川の全測量、人材育成のための水利学校設立など広範囲に渡るもので、後年の治水計画の基礎となる重要なものばかりだった。また、明善は「治水の元は上流の山々の治山である」との考えから、北遠地方を中心とする植林事業にも尽力した。これによって整備された「金原山林」は、「天竜美林」と呼ばれる高品質の木材資源として、今日まで受け継がれている。

明善ら先達の努力により、穏やかな流れとなった天竜川。しかし、水害の発生は未だにゼロではない。大自然の猛威と人々の戦いは、これからも続いていくだろう。



▲ 明善は天竜川の治水に92年の生涯を捧げた



▲ 明善の業績を紹介する「金原明善翁生家」(東区安間町)



▲ 喜長の功績を称え、掘割現地に建てられた碑

「暴れ天竜」と戦った男たち

探訪



の現場

浜松風 一瀬堂際物店

浜松まつりの空に舞う 子どもたちの誕生祝う大風

ものづくりのまち、浜松で脈々と受け継がれる匠の技。そんな匠の現場を、まじん職員が訪ね、レポートします。今回は、本店の渥美千佳が浜松の風製作の老舗、一瀬堂際物店(中区池町)を訪問。四代目の古橋通悦さんにお話を伺いました。

REPORTER

浜松信用金庫本店

渥美千佳



渥美 浜松風をこんなに近くで見ただけは初めてです。想像していた以上に大きいですね！ 風は日本各地で作られています。浜松ならではの特徴を教えてください。

古橋 浜松風は形が正方形で、真ん中から尻尾骨が出ているのが特徴です。風揚げ中の糸切り合戦に耐えられるよう、細かな骨組みで頑丈に作っています。大きさは最大で十帖（二辺3・64メートル）です。風揚げ

には、四帖（二辺2・4メートル）から六帖（二辺2・9メートル）が最適だと言われており、ここ10〜20年で注文が多いのもそのサイズですね。浜松まつりに、男児の初子の誕生を祝う初風や風揚げ合戦が栄えりなっています。この工房は、私の祖父の親方（一瀬亀太郎）が明治14年（1881年）に創業したので、風の需要が増した頃と重なりますね。

渥美 代々技術を受け継いで、製作に励んでいらっしゃるんですね。こうして間近で見ると、鮮やかな色にも目が引き寄せられます。

古橋 日の光に鮮やかに透けて、くっきりと見えるように、染料で塗っています。私たちが製作している風は、紺と赤を基本色に用いるものが多いです。風が空高く揚がったときに一目で町名がわかるように、一文字のデザインが主流です。町印の周



古橋さんの説明を聞きながら、製作の現場を拝見。職人さんたちの真剣な筆さばきに見惚れます

りには、家紋やお子さんの名前を加えます。最近は初子に限らず、次子や女兒にも風を作る方が増えていきます。浜松の風は、子どもも大切に想う気持ちの表れですね。



渥美 風の材料は竹と和紙、糸と染料です。製作の工程は、まず竹を組むことから始まるんですか？

古橋 はい。風に適した竹を選び、強い風にも耐えられるように弓なりにしならせる作業から始まります。これは専門の職人さんをお願いしているんですよ。竹は網の目状に組み、横骨は太い竹と細い竹を交互に配置。さらに、対角線状にクロスさせて太い竹を入れることで強度が増します。現在、私どもの工房がお付き合いのある町内は市内174町のうち50町ほど。年明けから作業を始め、100〜150枚製作します。町内ごとに「軽と重視」「頑丈と重視」などのご希望があるので、できる限り応えるように努めています。

渥美 同じ材料でも工夫次第で、少しずつ仕上がりを変えられるんです



ね。（竹に触らせてもらいながら）想像以上に軽く、よく曲がります。この竹を組んで和紙を貼り、乾いたら色を塗っていくんですね。（女性二人が作業している様子を見て）筆で描いているのは何ですか？

古橋 溶かした蠟（ろう）を筆に含ませて、蠟引きという作業をしています。和紙に染料がにじんで広がるのを止めるためです。線の太さは1センチ位で、下書き通りに引くには集中力と丁寧さが不可欠。こちらの二人は3年以上担当しているベテランです。渥美さんも挑戦してみますか？

渥美 はい。（筆を和紙に滑らせながら）確かに、均等な太さに引くのがむずかしいです。熟練の技ですね。

古橋 蠟が乾いたら、いよいよ染料を塗っていきます。経験を積むと、どのぐらいの量を載せればムラなく均一に仕上がるかがわかってきます。繊細に、素早く。そして大胆さもモノを言う作業です。さあ、渥美さんもやってみてください。

渥美 軽く筆を置いたつもりなのに、あつという間に色がにじんでしまします！ 色の濃淡を均一にするために筆をサッと動かす勢いも必要ですね。（和紙に触れながら）もつと硬い紙かと思っていたら柔らかいですね。



浜松まつりの空に飛翔する、一瀬堂際物店製作の相生町の風。「きれいに揚がると本当にうれしいものです」と古橋さん

一瀬堂際物店さんの取材の様子は、浜松信用金庫ホームページ内のはましんチャンネルのサイトにて動画でもご覧いただけます。

息子や職人さんたちと力を合わせて良い風を作り続けます

まだまだ修行の身。三代目の父を目標として励みます！



握って巻いて寿司職人編



うっ、むずかしそ...



せんせい、だいじょうぶ?



うしろ姿からも真剣さがにじみでています

さあ、今回からスタートした新企画、こんなことあんなことを「やってみたい!」という子どもたちの声に応えます。地元幼稚園の園児たちにプロの仕事体験してもらい、幼心に秘めたパワーと好奇心の芽を育てようというものです。浜松の未来を担うキッズたちの奮闘ぶりをご紹介します!

本日の講師

横田

知佐子さん



ここは浜松駅から南へ徒歩2分、大きな木の看板「浜名湖の恵味末広鮎」が目印の老舗寿司店。ランチタイムが終わった午後2時、ワクワク寿司握り体験がスタートです。

本日の講師は、キリリとした姿に優しい笑顔が素敵な寿司職人、横田知佐子さん。「末広鮎」の三代目として日々腕を振るい、日本食の魅力を伝えていきます。なんと、普段から小学生たちに寿司握りを教えているそう、今回は特別に幼稚園の子どもたちの体験教室をお願いしました。

一方の「ギッズチャレンジ」は、この春、ひくま幼稚園、湖東幼

おすし、大スキ!
おかあさんたちに
もつくってあげる



つめたい〜!



幼稚園を卒園したばかりの小春ちゃん、更助くん、蒼結ちゃん、連介くん、奈都希ちゃん、晴基くんの6人。みんな可愛いエプロン・三角巾姿で準備万端です。

「こんにちは。お寿司好きですか?」「はい!」「何が好きですか?」「まぐろ!」「かつぱ!」。横田さんと子どもたちの元気なやりとりの声が響く中、本日のネタが登場しました。マグロ、イカ、サーモン、エビ、玉子焼き、そして巻物の具。実際に握るネタを見せてもらって、子どもたちもちよつとドキドキです。

「まず一人ずつ握手させてもらってもいいですか?」。そう言って、6人の小さな手をそつと握る横田さん。これには「よろしくね」というごあいさつのほか、もう一つ別の意味が。「手が温かいとごはんがたくさんつちやいます。氷水に手をつけて手を冷たくしてから握ってもらいますね」。つまり、子どもたちの手の温かさを確認するというわけです。

教室では、子どもたちの緊張をほぐすために、大人が先に見本を見せていることもあり、今回はまず引率の山本先生と石原先生が挑戦しました。調理場には、すでにまな板やネタがきちんとセットされ、寿司だねは横田さんが渡してくれま

最初に握るのはマグロ。氷水で手を冷たくして、手酢をつけます。

「では、いいですか?左手の指の上にマグロを乗せて、右手にしゃりを持って、親指で押さえてはさんでキュッ。ひっくりかえして、キュッキュッ」。横田さんが軽やかに寿司を握ると、それを見ながら山本先生と石原先生も握ります。そんな姿を真剣なまなざしで見つめる子どもたち。「わあ、べとべと」。一つ目は力が入りすぎたようで、少々べちゃんこな握りに。でも、大人がちよつと失敗するところを見せるのも、子どもたちを安心させる秘訣です。

「上からは押さえるだけ。やさしく、ひよこを握るみたいに」。横田さんからアドバイスを受けると、さすが先生たち、次のサーモンからはなかなか上出来。そうして巻物まで、先生たちが見本を見せながら、子どもたちにポイントを伝えていきます。さあ、続いては、いよいよ子どもたちの番。先に男の子3人がチャレンジです。「つめたい!」。氷水でごしごし手を洗って思わず声をあげる蓮介くん。「左手にまぐろを乗せてください。そうしたら、右手でしゃりをもって乗せて、ひっくり返して」。横田さんの説明をきちんと聞きながら、丁寧に手を動かす晴基

できましたー!!





くん。「上手！」と先生とお母さんたちの声がかかると、満面の笑顔の吏功くん。「そうです。いいですね。キユッキュッ」。横田さんはほめ上手。男の子たちは、まるで工作を楽しいように上手に握っていきます。

さて次は、女の子の番です。男の子たちの握る様子をじーっと見ていた3人はいざ調理場へ。腕まくりしてチャレンジです。小さな手でしっかりと握る蒼緒ちゃん、興味津々の表情の小春ちゃん、みんなに見られてちよっと恥ずかしそうな奈都希ちゃん。それぞれネタにしゃりを乗せたらひっくり返して、みんなで一緒に「キユッキュッキュッ」。手を上下させながら握ります。

さて、握りに続いては巻物。巻きすの上に浜名湖産の海苔を敷き、その上にしゃりを乗せます。そしてサニータス2枚をチョウチョのように置き、玉子、ツナ、キウウリを乗せて、手前からコロコロッと巻いていくだけ。こんもり具が乗っていたのに、見事に巻き上がりました。「これはおうちでも簡単にできます。お母さんに教えてあげてくださいね」。横田さんにそう言われ、ちよっと得意げな女の子たち。最後の盛り付けは、横長の皿にそれぞれ好きな順にお寿司を乗せて、ついに完成！男の

子も女の子もみんなで拍手！

そして、みんなテーブルに着いて試食タイム。ここで横田さんから「質問です。『お皿の上のお寿司って、左上から右下へと並んでいます。どうしてかわかりますか？』。子どもたちがキョトンとしてしていると、お母さんから「右利きだと、その方が取りやすいから？」と答えが出ました。

「そうです！食べやすく盛ることもおもてなしのひとつなんです」。お寿司を握るということは、日本文化を学ぶことでもあるんですね。

「それでは、みんな頑張ったので、もりもり食べてくださいね」はー

い！。それまでの緊張が解けたのか、大きな口を開けて、出来立てのお寿司を頬張る子どもたち。「おいしー！」。みんな最高の笑顔です。そしてお母さんたちも、子どもが握ったお寿司を一緒にいただいて大感激。「横田さん、今日はどうもありがとうございました！」。

第1回のワクワクチャレンジは大成功。プロの技を教えてもらい、寿司を握れるようになった子どもたちには、おうちでもぜひチャレンジしてもらいたいものです。もしかして、この中から未来の寿司職人が生まれるかもしれませんね。

本日のご協力

末広鮎

浜松駅新幹線口から南へ2分、近所の人たちが気軽に立ち寄り、ちよいとつまめる小さなお寿司屋さん。三代目の横田知佐子さんは、県西部で初めて女性でフグの処理師免許を取得した女性寿司職人。「ねえさん」と親しまれ、二代目の大将とともに、地産地消の舞阪港や雄踏港でとれた新鮮な素材を使って寿司を握る。季節ごとに器や花を変えるなど、細やかなおもてなしも評判。ランチのワンコインメニュー（税込500円）は女性客に大人気。20年ほど前から小学生を対象にした寿司握り体験を開催。「いただきますとごちそうさまが言え、感謝して食べることを伝えたいですね」と、食育の大切さを強調している。寿司体験は要予約で、1回3人まで。

浜松市中区砂山町360-6
TEL 053-452-6288



はままつ食味紀行

もち鰹

遠州灘がくれる希少な旬の恵み

文◎高橋秀樹



静岡県は鰹の漁獲量日本一だ。鰹節の生産高は鹿児島県に次いで二番目である。鰹大国だ。そうしたことを背景に、それぞれの漁師町に伝統的な鰹料理が残っている。西伊豆の田子には丸ごと一本塩漬にした「塩鰹」がある。塩からいけどお茶漬けにすると旨い。焼津には鰹の炊き込みご飯「鰹飯」。御前崎の「ガワ汁」は、鰹を細かく叩いて氷水で溶いた味噌汁に入れ「ガワガワ」とかき混ぜ、刻んだキュウリやネギ、ミョウガ、大葉などを薬味に頂く夏の味

覚。そして、わが浜松には「もち鰹」がある。舞阪漁港に漁師の渡辺英治さん（魚徳丸）を訪ね、話を聞いた。「もち鰹」と言っても、特別な種類の鰹ではありません。普通の鰹だけど、その食感が独特なんです。漁期は4月半ばから5月一杯くらいで、初鰹の季節。漁場は片道2、3時間の遠州灘です。朝4〜5時の日の出から漁を始めて午後2時の競りに間に合わせ、その日の夜には食卓に上る。つまり鮮度が命なんです」と渡辺さん。漁法は、両舷に竿を出しバ

ケ（疑似餌）の付いた糸を流し引く引縄釣法。釣れた鰹の頭を即座に叩き、水を張った桶で血抜きをする。このシメ方が肝心なのだ。シメた鰹は傷が付かないよう氷とスポンジのベッドに丁寧に寝かせられ、水揚げされる。

もち鰹といえば刺身である。まず見た目が美しい。淡く艶やかな赤身だ。肝心の味だが、驚くのはその食感である。鰹の一本釣りが盛んな御前崎の生鰹も十分もちっとしておいし

いが、もち鰹のもちもちは尋常ではない。この餅のような食感こそが名の由来なのだ。もちもち感の後に臭みのない、淡泊な鰹の味がやってくる。「その日のうちに食べるのでもいいですが、二日目くらいだと脂が回ってきて旨味が出ます」と渡辺さん。

近年、もち鰹の漁獲量は減少気味だという。それに、遠洋ものと比べたら1〜2キロと小ぶりだ。「地産地消」の希少な旬の味覚といえる。冷凍技術の進歩で1年中食べられる鰹だが、旬を味わうという食文化は残してほしい。



舞阪漁港 えんばい朝市

DATA

舞阪漁港
浜松西区
舞阪町舞阪

主催・お問合せ
舞阪漁港えんばい朝市
実行委員会
TEL 053-592-3811 (平日)
TEL 053-592-0320
(えんばい朝市当日朝6時以降)

漁師が漁の獲物を乗組員と分配した後、持ち帰ったものを親戚や隣近所にふるまう昔からの習慣「えんばい」が由来。2000年から始まり、舞阪町の海産物や加工品、農作物などを販売。

今年は4月から7月の月イチ開催

舞阪漁港を開放して新鮮な特産品などをお手頃な価格で販売する「えんばい朝市」。18年目になる今回は例年より時期が早まり、4月から7月の第3土曜日、午前7時から10時に開かれています。春から夏にかけては、シラス漁が盛んなる季節。旬の味を求めて、朝早くから大勢の買い物が駆けつけます。開催日には色鮮やかなのぼり旗と大漁旗が賑わいを一層演出しています。



シラス漁船の到着で活気は最高潮



朝市当日の漁の予定は、前日の午後に「舞阪漁港えんばい朝市公式ホームページ」で配信されます(※)。たとえ休漁で生シラスの販売が中止でも、「えんばい朝市」の魅力は他にもたくさんあります。有志の女性たちがその場で揚げたて、焼きたてで提供してくれる特産グルメの数々。香ばしいシラスの天ぷら、舞阪香り焼き、うなぎをのせたお好み焼きなど、ここでしか味わえないものばかり。港町の食文化を存分に堪能できるこの機会をお見逃しなく！

常連さんのお目当ては何と言っても、その日に水揚げされた「生シラス」。整理券を片手に、早朝に出港したシラス漁船の帰りを待ちます。朝市の開催中に大漁のシラス船が続々と港に到着。水揚げされたシラスは手際よくパック詰めされ、売り手の威勢の良い掛け声が響く中、飛びよるに売れていきます。獲れたてのシラスは透明できらきら！ 漁場に近しい舞阪港だからこそ、鮮度最高、絶品の生シラスが手に入るのです。

港町の料理上手な女性たちが大活躍



(※)舞阪漁港えんばい朝市公式ホームページ <http://enbaisaichi.webcrow.jp>

for your smile ～あなたの笑顔に逢いたくて～ 浜松信用金庫

【イジャ】
ija!
Vol.11 Spring & Summer 2017

まち・人・文化 地域情報誌 ija! [イジャ]は、地域のみならず浜松の文化的な魅力を発信し、心豊かな生活に役立てていただくことと発刊したものです。
[イジャ]は遠州弁の「いじゃ(さあ、行こう)」。
この地域にふさわしい、前向きで未来志向のメッセージをタイトルに込めています。

2017年4月発行

発行 ● 浜松信用金庫
〒430-0946 浜松市中区元城町114-8
Tel. 053-450-3250

ホームページ ● <http://www.hamamatsu-shinkin.jp>
編集・制作 ● 株式会社メディアトーク

